



Title	アジア太平洋論叢 第15号 序
Author(s)	赤木, 攻
Citation	アジア太平洋論叢. 2005, 15, p. 1
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/100011
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

序

東京生活が1年半を超えようとしている。今の仕事は、留学生の受け入れと送り出しの支援に関わっている。なかでも、通称「お台場」と称される地域の一角に建っている「東京国際交流館」と称する留学生宿舎の世話が、大きい仕事である。この宿舎は、その広さや設備から世界でもっとも立派な留学生宿舎といわれているが、おおよそ75の国や地域からの留学生(大学院生と研究者)とその家族約850人が暮らしている。おそらく、日本における世界の若い知性の集合場所としては最大級であろう。

その背景がきわめて多様な人々が、偶然にも時と場所を一にして生活しているわけで、そのことを大切に考え、私は可能な限り多くの相互交流の機会をつくろうと様々な企画を立てるよう心がけている。実際、彼らと意見を交換し、話し合うことは実に楽しい。また、彼ら留学生同士が語り合っているのを見てみると、うれしい限りである。国際感覚に富む彼らが数年後にそれぞれの社会の中で活躍する存在に成長することを思うと、まさに留学生(留学交流・学生交流)はある意味での「国際公共財」そのものであると痛感する。この東京国際交流館で「偶然出会った」者たちが、交流を重ね相互に認知し合う関係を構築したとすれば、それはもはや「偶然の出会い」ではなく「必然の出会い」といえるのではなからうか。その「必然の出会い」が長期的には国際的利益をもたらすのは間違いない。

21世紀の世界は様々な課題を抱えているが、解決へのもっとも基本的な方法は「人的交流」であろう。留学交流・学生交流はその最右翼に位置している。莫大な財政赤字を背景に国の留学事業関連予算も削減の方向にあるようだが、長期的視野に立った国家戦略としてのより活発な学生交流政策が真剣に検討されねばならないのではなからうか。

『アジア太平洋論叢』も15歳に成長した。執筆者には数年前大阪外大で「必然の出会い」を経験し現在は中国で教壇に立っている元留学生も加わっており、執筆陣の広がりを感じる号となっている。なお、当会の発足以来お世話になっている瀧口恒夫先生が、この春大阪外大を定年退職された。今後ともアジア太平洋研究会の活動を支えていただくことには変わりはないとしても、この機会に深甚なる感謝の意を表する次第である。

2005年 9 月

会長 赤木 攻